

「熊本大学ハーン展示会・講演会」のこと

西川 盛雄

今年の夏期休暇の間、8月7日（水）から24日（土）にかけて私はヨーロッパにおけるラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の生誕から幼少時代、学校時代にかけての足跡をたどるべくレフカダ（ギリシャ）、ダブリン（アイルランド）、ダラム（イングランド）の三つの町を訪ねた。それぞれ学術的にも重要な場所である。訪問先はそれぞれ（1）レフカダでの市庁舎、詩人公園、パラスケヴィ教会、ハーン生家、ハラモグリ図書館、（2）ダブリンでの作家ミュージアム、4つそれぞれのハーン旧居と関係者からの談話・聞き取り、（3）ダン・レアリーの東・西の波止場とサンディコーヴの海岸、（4）ダラムでのアショー・カレッジなどを含んでいる。とくにレフカダはハーン生誕の地であり、スクリロス市長から正式な招待状をいただいております、こちらからは熊本市長の親書と資料を預かり、さらに本学図書館長と五高記念館長にお願いしてメッセージと資料をいただきこれらが無事レフカダ市長に直接お渡しすることができたことは幸いであった。

帰国後一ヶ月、9月19日（木）から27日（金）まで図書館自由閲覧室においてラフカディオ・ハーンの展示会と講演会を行った。主催は熊本大学附属図書館と学術資料調査研究推進室、協賛は熊本大学小泉八雲研究会である。五高記念館からも資料提供があり、協力を得ることができた。オープニングの19日は文学部教授の金原 理先生による「小泉清（八雲の三男）の話」の講演、27日の最終日は教育学部の外国人教師のアラン・ローゼン先生による「ハーン最後の日々」の講演で締めくくった。展示会、

講演会ともども一般の方々の参加もあり、講演会では質問も活発に飛び交い充実したものであった。

この期間を選んだのには理由があった。最終日前日の9月26日はハーンが1904年に亡くなった命日に当たる日である。しかも98回目の命日ということであと2年後には没後100年という節目の年を迎える。いわば今年は二年後に向けたホップ、ステップ、ジャンプのホップに当たる年である。この26日にハーンを偲ぶということは毎年熊本ではなく、ハーンに縁のある他の都市でもなされているのである。

私たちは以前から何度か協議を重ね、五高資料館から資料と図書館所有の貴重な資料と相俟ってハーン作品の初版本はもとより、約120年前、シンシナティ時代にハーンが書いた記事が載っている新聞のオリジナル『シンシナティ・インクァイアラー』『シンシナティ・コマーシャル』の展示、ハーン直筆の試験問題、ハーンが居た頃の町シンシナティ、ニューオリンズの鳥瞰図の風景版画、龍南会雑誌のオリジナル、ハーンの給与資料、石仏や三角西港の写真、当時の五高生の写真、嘉納校長の送別の集合写真などいずれも貴重な資料を展示することが出来た。丁度熊本大学の公開講座「ハーンと漱石」の受講者の方も訪ねて来られ、タイミングよく喜ばれた。

1890年40才で来日したハーンは帝国ホテル支配人だったM.マクドナルドやB.H.チェンバレン先生の世話で横浜から松江（尋常中学）に行った。松江では小泉節と結婚、神話（出雲大社）と水（宍道湖）のある風景のなかでギリシャを思い出していたと考

えられる。その後熊本では嘉納治五郎校長のもと、五高の英語・ラテン語教師として勤め、秋月胤永先生と親交を深め、節との間に長男一雄が生まれた。熊本には松江に一年間いた後やって来た。後に在熊中の経験に基づいて『夏の日の夢』『停車場で』『石仏』『柔術』『願望成就』『橋の上』『九州の学生とともに』『生と死の断片』などの作品が生み出されている。

神戸では小泉八雲として日本に帰化し、港町に寄る外国人のための新聞『神戸クロニクル』に記事を書いていた。東京では学長外山正一の努力もあって東京帝国大学の英文学に移った。人事裁量権をもつ「学監」高田早苗の働きがあったのである。しかし、早稲田に移ったその年の9月26日、ハーンは心臓発作で他界したのである。

日本在住14年間はハーンにとっては松江－熊本－神戸－東京（新宿）と移動したが、これは期せずして旧き良き日本の守られているところ（周辺部）から守られなくなりつつあるところ（中心部）への旅であった。明治維新以降新政府の方針で日本の近代化・西欧化の波は加速度的に大きくなった。結果としてハーンは大都会に行けば行くほどそこは逆説的にハーンの心からは離れた場所になっていった。そんな中にも日本を西洋人であるハーンが日本のことを欧米に英語で渾身の力を振り絞って紹介していったことは特筆されていい。

2004年はハーン没後100年である。世界中のハーン縁の場所で節目になる催しが開かれる。ギリシャでもハーンの母親ローザ・カシマチの生れたキシラ島で記念シンポジウムが開ければ嬉しい旨の抱負を元駐日ギリシャ大使だったコンスタンティノス・ヴァシス氏は語っておられた。熊本大学は五高記念館、図書館所蔵の資料、さらにキャ

ンパス全体を含めてハーンに深い関わりをもっている。そして確かに本学はハーンや漱石研究に関して継承・顕彰すべき、そして活用すべき歴史的、文化的財産を豊かにもっているのである。

(にしかわ もりお 教育学部教授)